『初めての広島、今でも蘇る』

２０１９年３月、今でもテレビや新聞で広島と聞くと、８年前初めて広島を訪れたことが私の脳裏に蘇ってきます。私にとって、一生忘れられない悲しい体験でありました。

１．何故、広島へ　２０１１年

去年の９月２２日、ある本を購入しました。新聞の広告でその本の存在を知り、その題名がどうしても頭から離れなくなってしまいました。直ぐに本屋さんに予約をして購入致しました。その後、何度かその本を手にするのですが、怖くて、恐ろしくて、読むことができないのです。

購入してちょうど１年たった９月２８日（水）、その本を持って広島を訪れました。明日、平和記念公園へ行く予定です。自分の目で、戦争の悲惨さ、原爆の惨さ、それに立ち向かった日本人の姿を見たいと思います。戦争と日本人については、今までもテレビや本などからいろいろな観点で知ることはできました。戦争勃発の背景・原因、戦争の責任と言う観点でもいろいろな解釈があります。原爆の使用に対する見解についても、アメリカ側、日本側で大きく異なります。私は、右翼でもなく左翼でもなく、決まった宗教を持っているわけではなく、思想的には中立だと思っています。ただ、戦争については、何故同じ人類が、一番野蛮な行為殺人をしてまで、国策を守るのか理解できません。ましてや何もしていない、何も知らない一般市民が、一瞬の内に何万人と殺されてしまう様な行為は許されるはずはないと思います。

２．初めての広島

９月２９日（木）５時４５分起床。ホテルの１５階から広島の街並みを見ています。空は雲っており、遠くの黄金山に霞が掛かって幻想的です。

７時１５分、原爆ドーム、平和記念資料館、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館などがある平和記念公園へ向かいます。ホテルからゆっくり歩いて、７時３０分原爆ドーム入り口に到着。見上げるとそこに原爆ドームがありました。想像を絶する姿に唖然としてしまいました。遠くから見えるシルエットは、何か霊気が漂っている様な不気味な感じがします。近くに行くと、破壊のエネルギーを感じます。レンガの上に塗られていたコンクリートは剥ぎ取られ、鉄骨は熱でひん曲がっています。建物の大きなコンクリートの残骸が回りに無造作に転がっています。建物の壁はところどころ真っ黒に焼け爛れています。てっぺんのドームは鉄骨のみ残っていますが、その形が恐ろしい。小生、骸骨に見えてしようがありません。近くにあった説明板を読みました。

『1945年8月6日午前8時15分、人類史上初めて原子爆弾が細工町の島病院の上空約580mでさく裂し、爆心直下の一体は人も街並みも全滅しました。
焼け跡には、広島県産業奨励舘の残骸（現在の原爆ドーム）だけが、象徴的な姿をさらしていました。』
私は近くのベンチに座って原爆ドームを見上げています。
東京裁判時のレイクニー弁護人の「広島、長崎への原爆投下という空前の残虐を犯した国の人間に、この法廷の被告を“人道に対する罪”で裁く資格があるのか」という証言を思い出していました。
原爆ドームは当時爆風がほとんど垂直に働いたため建物の一部の壁などが倒壊から免れ、最上階の球型のドームも一部残存できたそうです。それにしても、被爆前の建物の写真がありますが、似ても似つかぬ形をしています。当時、中にいた人たちは全員即死だったそうです。即死、その言葉が胸を打ちます。世界遺産として残されて原爆ドーム、姿形よりも、その悲惨さ、人々の悲しみを受け継がれるべきと思います。
その後、私、重い気持ちで元安橋を渡ります。下を流れる元安川は、当時何万という被爆した人が水を求めて入水し亡くなっているといいます。川の水の色は暗く、悲しみの色に見えました。更に進むと、公園の中央に石室があります。そこには、以下が刻まれた祈念碑がありました。
『安らかに眠って下さい
　あやまちは
　繰返しませんから』
そして、石室の先には平和の灯が赤々と燃えており、更にその先には原爆ドームが見えています。私は、自然と手を組み、しばらく祈っておりました。
8時20分、平和記念資料館の入り口の前にいます。開館まで10分、入り口には
『広島原爆投下からの日数　24160日
　最後の核実験からの日数　00182日』
と電工掲示版に表示されていました。
8時30分、東館入館、先ず目についたメッセージは、
『　戦争は人間のしわざです。
　戦争は人間の生命を奪います。
　戦争は死そのものです。

過去を振り返ることは将来に対する責任を担うことです。
ヒロシマを考えることは核戦争を拒否することです。
ヒロシマを考えることは平和に対して責任を取ることです。
１９８１年　２月２５日　ローマ法王　ヨハネ・パウロ2世　』

東館1Fは、原子爆弾の開発から広島への投下までが示されています。

・何故開発したのか

３年の歳月と20億ドルと12万人を費やしたそうです。

・なぜ日本に投下することを決めたのか？

アメリカは、原爆投下により戦争を終結できれば、戦後ソ連の影響力が広がるのを避けられ、また膨大な経費を使った原爆開発を国内向けに正当化できると考えていました。

折乃笠談：表向きは確かにそうだと思います。 しかし、その根底にはもっと悲しい事実があります。展示物の中にハイドパーク覚書の原文のコピーがそれを現していることを小生は知ることになります。後で語ります。

・なぜ広島に投下したか？

アメリカは、原爆の効果を正確に測定できるよう、約4．8km以上の　市街地を持つ都市を選びました。その後、広島を第一目標としたのは、目標都市の中で唯一、連合国軍の捕虜収容所がないと思っていたためです。

折乃笠談：広島は明治時代から軍都であり、大本営が置かれており、明治天皇も常駐していたそうです。昭和に入っても、最強の第五師団を有し、近くには三菱重工の戦艦造船所や兵器製作工場が多数あったそうです。アメリカは、そのような軍事施設を潰す事も考えていたのではないかと思います。

東館2Fは、戦争・原爆と市民を示しています。

・広島は、原爆投下によって、都市基盤そのものを奪われました。被爆者や原爆孤児はもとより、復員軍人や引揚者、疎開先から帰ってきた人びとなど被爆をまぬがれた市民も、家や職を失いました。しかし、市民は被爆直後の混乱期、敗戦、占領下の大変動の中で、困難にめげず、生活の再建へと立ち向かいました。

折乃笠談：いくつかの写真から困難に立ち向かう市民の様子が伺われました。 しかし、原爆孤児となった子供たちが懸命に靴磨きをしている姿や被爆した時母親の胎内にいて障害を持って生まれてくる子供たち・・・

何の罪も無い子供たちがかわいそうでなりませんでした。

そして、本館に進むと、遺品や被爆資料が展示されていて、１９４５年８月６日、広島に何が起こったかを伝えています。

折乃笠談：放射線による被害、熱戦による被害、爆風による被害の写真は、破壊された建物、変形変色したいろいろな遺品、そして人びとの凄まじい悲劇的な様相・・・　かろうじて生き残った人びとも、焼けこげて血みどろになったボロボロの衣服をわずかに身にまとい、瓦礫の街をにげまどったそうです。思わず目を背けたくなりますが、熟視して事実を知ることがせめての供養だと思いました。展示物は、原爆使用という人類の深い過ちを後世まで多くの人びとに伝えるものなのだと思います。展示物を見て、じっとたたずむ人、祈っている人、両手を合わせ額を置いて泣いている人など、本館の展示場は重苦しい雰囲気でありました。

私は重い足取りで次の目的地国立広島原爆死没者追悼平和祈念館に向かいました。

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館は、国として、原爆死没者の尊い犠牲を銘記し、追悼の意を表わすとともに、永遠の平和を祈念するため、２００２年８月に開館しました。併せて、原爆の惨禍を全世界の人々に知らせ、その体験を後代に継承するための施設です。

・原爆死没者の氏名と遺影（写真）

・被爆者体験記

・企画展　”しまってはいけない記憶　さし出された救いの手”

折乃笠談：情報展示コーナーで多くの被爆された方の体験記を読みました。心が張り裂けそうです。

一点紹介致します。

『原爆が投下された瞬間に吹き飛ばされて、家の中で気がついた。
黒煙で真っ黒で何も見えない。
しばらくすると、小さな光がわずかに目に入ってきた。
その光音頼りに歩いて行くと、格子戸の玄関であった。
外に出ると、すでに狭い道は瓦がいっぱい散乱し、歩くにも
困難な状態で人々は泣き呼び、大人も子供も流血し火傷で
顔の皮膚がずるりとむげ、ぶら下がっている。

又、背中や腕足も水泡ができた人々で、右往左往と走っている。
私も何が何か分からず、人の後をついて走った。』

被爆して亡くなった人は14万人だそうです。

私、再び原爆投下目標地　相生橋に行ってみました。T字型の端で、上空から分かりやすかったそうです。橋の下の川は、暗い緑色をしていました。その時、観光バスを降りた小学生たちが元気に走って平和記念公園に入って行きました。

3. ある本の内容

冒頭で話したある本を昨日、広島行のぞみの中で涙ながらに熟読致しました。

『原爆は日本人には使っていいな　岡井敏　早稲田出版』

ハイドパーク覚書を語った、あまりにも衝撃的な内容でした。

ハイドパーク覚書

『1944年9月18日、ハイドパークでの大統領と首相の会話に関する覚書

1. 管用合金の管理と使用については、国際協定を考慮に置き、管用合金を世界に公表すべきであるとの意見があるが、この意見は受け入れられない。
   本件は、極秘にし続けるべきものである。
   しかし「爆弾」が最終的に使用可能になった時には、熟慮の後にだが、多分日本人に対して使用していいだろう。
   なお日本人には、この爆撃は降伏するまで繰返し行われる旨、警告しなければならない。
2. 管用合金を軍事目的、商業目的に開発する米英両政府間の完全な協力作業は、日本敗北後も、両政府の合意によって協力が停止されない限り、継続されるべきである。
3. ボーア教授の活動については調査する必要がある。
   教授には、特にロシア人に対してだが、情報を漏らさない責任があり、この保証措置を取らねばならない。

9月18日　ルーズベルト　チャーチル』

ここで、管用金属とは原子爆弾の暗号名です。

そして、恐るべきことは、日本降伏1年前、ドイツもまだ降伏していない中で既に『原爆は日本人に使用』と書かれていることです。

実は平和記念資料館にそのハイドパーク覚書原文のコピーが展示されていたのです。

『when a ″bomb″is finally available, it might perhaps after mature consideration,
be used against the Japanese.』
原爆は日本人には使っていいな
小生、その場で鳥肌が立ってしばらく動けなくなりました。
これは我々日本民族に対する屈辱であります。
著者の岡井氏が本の中で言っているように、この部分については日本では隠そうとしています。もっともっと日本国内で議論し核廃絶の根本に迫る必要があると思います。
4. まとめ
今回、自分の目で、戦争の悲惨さ、原爆の惨さ、それに立ち向かった日本人の姿を見てきました。結果、原爆が広島に投下される背景、投下された後の悲惨さと悲しみ、再建に立ち上がった人たちをいろいろな観点から知ることができました。
平和記念公園の中央に石室があり、そこには、以下が刻まれた祈念碑がありました。
『安らかに眠って下さい
あやまちは
繰返しませんから』
最後にまとめとしてこの文の意味を考えたいと思います。
ここで『あやまちは繰返しません』の主語はだれなのか？
戦争を起こし、人類史上初めて原爆投下してしまった人類なのか？
戦争に参戦し、結果的に原爆投下をさせてしまった日本人なのか？
広島の原爆投下という空前の残虐を犯したアメリカ人なのか？
『安らかに眠って下さい』は、原爆で亡くなった多くの日本人、中国人、朝鮮人、他国の方々に対して言っているのだと思います。
そうすると、主語が人類というのはあまりにも、拡大解釈の様な気がします。
主語が日本人？８月６日時点では、日本はすでに敗北しており原爆はまったく不必要だったと思います。よって、戦争に参戦した事と原爆投下は結びつかなく、主語が日本人ということは考えずらいと思います。そうすると、原爆を開発し、日本人に対し原爆使用を決定し、原爆投下したアメリカ人が主語？ありえないと思います。
この文は、非常に感動的で心から反省したくなる文だと思いますが、主語があいまいで、責任所在がはっきりしていません。
世界平和都市、核廃絶を訴えるなら、もっともっと日本国内で議論し、核廃絶の根本

に迫る真実を示す必要があると思います。
最後に、広島、長崎で被爆し、深い悲しみの中亡くなられた方々のご冥福を
心よりお祈り申し上げます。
広島はどんよりと曇り空でした。

次ページあります

折乃笠公徳「初めての広島、今でも蘇る」について

多くの読者とほぼ等身大の、また、同じような日常生活をしていると思われる一般市民の、初めての広島への旅です。作品は、広島を訪ねることになった動機、見聞が、旅程とともに紹介され、展開されていきますから、読者は作者と同行しているかの実感をもつことができます。そして、ともに見るべきものの前に佇み、感慨を共有することができます。

いわゆる論点を見出すというだけでなく、また、あらかじめ語るべき視点や、観念が優先されているわけではなく、広島にきてこそ、作者のなかに引き起こされてくる感情、悔恨、平和への意志が語られていくので、切実であり、実感があり、説得力があります。

また、ホテルからの町並みや、原爆ドームのシルエットなどに目を向け、スケッチするさまからは、作者の人物像がうかがえ、感性があり、文章に求められるリアリティがあり、作者への信頼をささえています。つまり、誰ではない、ひとりの作者がいて、体験をしているという確かさがあります。さらにいえば、身近さ、親しさがあります。

平易な語り口であり、このことが「人間とは」「命とは」「平和とは」の根源的な問いと見合っています。作者の声が聞こえ、態度も、明らかになっていきます。そして、そのために目指すべき、「核廃絶」という課題が、鮮明になっていきます。「ハイドパーク覚書」には、愕然とさせられます。まだまだ知らないこと、知らされていないことへの、もどかしさと、疑いがあります。

作品の構成も、その場、その場において、作者の着目したものと、率直な感想とがまじえられ、自然であり、誠実であり、臨場感があります。祈念碑の「安らかに眠ってください　あやまちは　繰り返しませんから」をめぐっての作者の自問自答と、指摘は、読者への問い掛けにもなっています。

この作品のメッセージは、これからも、将来にわたって、「初めての広島」を、大勢の人たちが体験していくことだ、ということでしょうか。そして「広島」は、いつも、いつまでも、「今日の問題」でなければならないという、訴えがあります。この作品は、そのことの大切さを、教えてくれています。また、広島を訪ねたことのある読者には、記憶をあらたにさせることでしょう。

多くの読者に読んでもらうべき社会批評になっています。

作家集団「塊」三神　弘

三神

第14回「文芸思潮」エッセイ賞
入選 通知

折笠公徳　様
折乃笠公徳

応募作品番号　122

作品名　「初めての広島、今でも蘇る」

このたびは第14回「文芸思潮」エッセイ賞に御応募くださいまして、ありがとうございました。「文芸思潮」エッセイ賞選考委員会におきまして、第一次選考・第二次選考・第三次選考に続き、最終選考が行われました。

厳正な審査の結果、あなた様の作品が

「文芸思潮」エッセイ賞 入選

となりましたので、お知らせいたします。おめでとうございます。

この選考結果は「文芸思潮」第73号（9月末発売予定）にて、発表いたします。

記念品・賞状は明年に送らせていただく予定です。悪しからずご了承ください。

まことにおめでとうございました。

2019年8月27日

「文芸思潮」エッセイ賞選考委員会
〒158-0083　東京都世田谷区奥沢7-15-13
TEL 03-5706-7847 FAX 03-5706-7848